

学 長 挨 拶

札幌学院大学長 狩野 陽

本日、災害情報に関わるシンポジウムを開催することになりました。ご承知のようにこのシンポジウムは社会情報と関係する各領域にわたる専門研究者の集まりですので、どうぞいつでも遠慮なく、ご質問なりご討議をいただき、その中でシンポジウムをお進めいただきたいと思います。

先程、勝井義雄先生がご指摘になりましたように、私にとりこのシンポジウムが8回目にして災害情報というテーマをとり上げたことに感銘深いものがございます。私は社会情報の中においてもっとも核心的な問題は災害についての情報だと思っておりました。これまでシンポジウムは情報とは何であるか、あるいは事実の中に含まれている情報は何か、あるいは言語の中に含まれているそれは何かという非常に多彩な問題をとり扱ってまいりましたが、それが

成熟して、災害情報というものを正面切ってここで論ずることができるようになったというのは、やはり社会情報学部が現実的な役割を担いつつあることの一つの証左であると思ってうれしく存じております。

災害はいずれも直面することが非常につらい突発的なあり方で、その茫然なすところを知らない周章の中でいかに対処し、避難するかという賢明な措置が何らかの形で用意されている必要があります。たとえば disaster・災害という言葉はもともとから言いますと、これは一種の悪い星のめぐりあわせとしてのきざしでありまして、何らかの予知とそれに対する心構えをおそらく含んでいた、それが中世のなかばにイタリアあるいはフランスあたりで使われてヨーロッパに広がったのだらうと思います。この場合はまた私たちが知っている半鐘のような反応とは違っております。生体が外界の変化を認知するばあい、私たちにとって外界の突発的な刺激というものはすべて一種災害のごとく生体を震わします。脳の中の微小な電位を観察してみますと、いかなる知覚刺激もその当初において瞬間的に猛烈な攪乱状態をつくります。攪乱状態の中で、たとえば聴覚系あるいは視覚系に入ってきた刺激はいろいろ側枝を通じて、たとえば眼球運動を瞬間的に統制し、そこへ目をやると、あるいは顔を動かす反応を生じます。しかしそれとともにより長大な神経連鎖をもって動物神経系だけではない植物神経系、つまり自律神経系の活動を誘発します。最初に交感神経系がいわばある高い興奮領域に入りまして、身が引き締まる。そして心拍が変わる。そしてまた血管が収縮して脳に対する血液流が多くなって、末梢の血管が収縮し、その後だんだんと手のひらに汗が出てくる。つまり生体はある意味において非常に安全だと思われる刺激に対しても突発的な変化にたいしても攪乱と活動水準の上昇と反応の組織化を起こしています。これは生体防衛と考えれば長い進化の経過の中で生じたかもしれませんが、感受系に入来するあらゆる突発的な刺激の変化は生体にとって短い災害であり、



狩野 陽 学長

その対処であるといえます。

私たちは災害を考えることによって、もっとマクロなレベルにおいて情報というものの本質的な私たちの生活に関わる在り方、あるいは反応に関わる在り方を考える契機になるのではないか。そういう意味で先程申しましたように、災害という情報は言い換えると私たちの情報の核心、ハートにある問題にふれていると考えられます。それを今日はわが国の代表的な災害情報についてのオーソリティであるお三方にお話をいただくということになりました。非常にお忙しい中、しかも恙なくここへおいでいただきましたことを大変うれしく思っております。

ここで、このような試みをあらしめた原動力は勝井義雄先生がこの大学にいらっしゃったことだと思えます。勝井先生が火山の、とにかく災害と関わりがあるかどうかはとにかく火山を愛していらっしゃることだけは確かであります。それが、勝井先生の趣味に本当にあうかどうか分かりませんがハザードマップの作成と普及に力を尽くされて、災害情報一つの有益な担い手としてこれまで仕事をされてこられました。勝井先生がこの学部をご退職になる前に、8回目の社会と情報に関するシンポジウムでこの災害情報を取り扱っていただいたというのは学院大学に対して大変な贈り物だと思います。これが情報の基本であり、しかも社会情報学が結実すべき一つの点が災害情報であるということをおそらく創設期の田中一先生は見抜いておられたと思われます。そのご助力についても敬意を表します。

今日は単に学部、あるいは狭い意味の研究者の領域にどまらず、より広い分野で活動される方たちによって情報についての論議をしていただけることを大変歓迎し、今日の有意義なご討論を希望いたします。お集まりありがとうございました。